

御土はんのう

第37号



飯能諏訪神社社殿

目次

- ◆飯能・諏訪八幡神社の由来…………… 2
- ◆飯能の近代和風建築調査 …… 羽生修二 2
- ◆飯能地方の”うちおり”…………… 石井英子 4
- ◆20世紀初頭の林業革命を考える
—西川林業地帯を中心に—…………… 加藤衛拓 4
- ◆江戸の残照と武蔵野の「地口行灯散歩」…………… 加藤栄子 6
- ◆編集後記…………… 関根貴志 8

飯能・諏訪八幡神社の由来

諏訪八幡神社は当地では「おすわさま」と呼ばれ厚い信仰を集めている。

創建は戦国時代の永正十三年（一五一六）で、当時この地方を支配していた武将「中山家勝公」が平重清（畠山氏）の協力を得て、信州の諏訪明神（建御名方命）を今の飯能第一小学校前にあった大泉寺の境内に勧請した。その後、天正十二年（一五八四）に家勝公の長男「家範公」が八王子城への出陣を前にして、戦勝と子孫繁栄を祈願し、八幡大菩薩（誉田和気命）を合祀して、現在地に社殿を造営し、社名を諏訪八幡神社とした。

家範公は惜しくも八王子城で戦死したが、その奮戦振りが徳川家康に認められ、家範公の二児は共に家康に召しかかえられ、長男「照守公」は後に二千五百石の御旗奉行に昇進。次男「信吉公」は御三家水戸藩の附家老に出世し、光圀（水戸黄門）を養育して二代目藩主に推挙し水戸藩の基礎をかため二万五千石の領主になった。又、照守公の曾孫「直邦公」は將軍綱吉の信任厚く三万石の大名に取立てられ幕府の要職に就き地元飯能を発展させた。「おすわさま」はこの様に由緒ある霊験あらたかな神社



獅子頭・安永年代(1772～1780)奉納

であるが、江戸時代には飯能村と久下村の鎮守様として村人に崇敬され、安永五年（一七七六）の大火で全焼したが氏子によって再建された。現在伝承されている獅子舞は安永の頃氏子が奉納したもので二百四十年の歴史がある。

明治十五年に町内会が成立し、神社は一丁目、二丁目、三丁目、河原町、宮本町の五ヶ町が護持し祭祀を行うことになった。五ヶ町では明治二十年から境内を西に拡張し、本殿を現在地に移し、本殿の覆殿と拝殿を造営し、次いで撰社。本社を境内に合祀し、明治四十年に社務所を新築した。続いて大正末から昭和初期にかけ神楽殿の新築、鳥居・石燈籠の移設、石段・玉垣の建設、敷石の布設を実施し、戦後は恵比寿神社の再建、社務所の建て替えを行い、更に集社社を新築して末社を奉遷した。

（飯能・諏訪神社の由来より）

飯能の近代和風建築調査

中間報告

羽生 修二

1、はじめに

平成26年度より埼玉県の近代和風建築総合調査が始まり、飯能市を担当することになったので、現段階までの調査結果を報告する。まず、近代和風建築の対象となる基準は、明治元年頃～昭和20年頃までに建てられた建築物のうち、以下のいずれかの条件にあてはまるものとされている。

① 伝統的様式や技法で建てられた木造建築物

② 一部に洋風の様式や技法を用いているが、主として伝統的様式や技法で建てられた建築物

そのほか、①、②に準ずると考えられる建築物

飯能市の場合、この基準に合う建物がかかなり多くあり、選択の基準をまず飯能の近代化を推進させた織物業と林業に関連する建造物に絞り込むこととした。そして近代社会が生み出した、役場、学校、郵便局、銀行、駅舎、病院、事務所、看板建築のような新しいタイプの施設も対象とすることにした。

2、近代和風建築の実例

ここで実際に調査を実施したい

くつかを紹介する。まず養蚕農家だが、坂石の岡田家住宅（明治中期）を挙げることができる。岡田家は農業や林業を営むだけでなく、教育者や医者を出した旧家で、建物の外観は切妻造鉄板葺2階建て、棟には養蚕用の温度調節に用いられる煙出しの小屋根が載る、典型的な養蚕農家の形式を見せているが、医院を開業していた時期に改修した部分があり、玄関など独特の建築となった。一方、養蚕専用の蚕室として建てられ、東吾野地区のシンボリックな建築となったのが、井上家蚕室（明治26年1893）である。施主であった井上信次郎氏の建築嗜好が強くあらわれた優れた建築であり、良質の材料を用いた飯能ならではの傑作といえる。



井上家蚕室

近代の新しい時代に登場した建築で、現在までそのままの姿で残っている木造校舎が飯能に現存している。旧北川小学校明治校舎（明治37年1904）・大正校舎（大正10年1921）と旧南川小学

校明治校舎(明治37年1904)・昭和校舎(昭和12年1937)である。どちらの校舎も二つの異なる時代の建物がL字型に校庭を囲むように配置され、時代の変化に伴って学校建築が改善されている様子が見える。なお旧北川小学校大正校舎は、調査後に老朽化が甚大なために、残念ながら解体された。



飯能市旧南川小学校

次に近代の西洋建築に影響を受けた建築をいくつか紹介したい。まず下名栗に残っている旧名栗郵便局(昭和4年1929)を挙げる事ができる。中心となる局舎の建物は、左右対称の調和のとれた外観を呈し、外壁を西欧の石造建築のように見せようとする人造石洗い出し仕上げにして、洋風の装

飾レリーフを施した建築であり、



旧名栗郵便局

近代の新しい息吹を表現しようとした時代の歴史を物語る貴重な遺産である。

銀座通りに面して、一際目立つ看板建築として取り上げたいのが、神田・吉川家(本体は明治、大正期に外観改造)である。もともとは4軒長屋だったが、現在は食堂と理髪店の2軒だけが残っている。外壁を石造り風に見せて、卵形のレリーフを柱頭に施した柱型や水平性を強調したコーニスなど、洋風の建築要素を採り入れた典型的看板である。仲町の飯能織物協同組合事務所(大正12年1923)は、横羽目板張りの外壁に縦長の上げ下げ窓を配列した洋風建築の外観を呈しているが、屋根は寄棟造瓦葺きで棟飾りに鯨瓦を用いて和風の趣を見せているのが特徴である。上名栗のJAいるま野旧名栗支店(昭和17年1942)も屋根は和風で外壁は洋風といった和洋折衷の建築だが、室内の2階

には、2間幅の床の間とその両脇に床脇を備える大座敷がそのまま残っており、何らかの形で保存・活用してほしい建築の一つである。

近代になって誕生した建築タイプとして、土蔵造り町家も含めることができ。大火の経験を踏まえて、東京を中心として広がった耐火建築なのだが、店の格式と権威を示す象徴的な建築として財力のある大店が採用したのである。現在では川越の蔵造りが有名であるが、飯能にも市指定有形文化財の絹甚(明治37年1904)がある。川越のように2階窓は観音扉の重厚な趣を呈してはいないが、



飯能市JAいるま野旧名栗支店

奥の木造真壁造りの居宅との境には、1、2階とも観音扉と土戸が備えてあり、店蔵を集中的に耐火構造にしようとする意気込みがわかる。内部の間取りも伝統的な通り土間形式を採用しており、川越とは異なる飯能独自の土蔵造り町家として重要な建築といえる。



絹甚

最後に町並みとして紹介したいのが、旧吾野宿である。ここは、江戸時代より馬継ぎの宿場として始まり、秩父観音や秩父三山参りの道として、また秩父絹の商取引の道として栄えてきた宿場町だった。そして、宿場町に平行して流れる高麗川を使って吾野の材木が西川材として江戸へ運ばれたこともあり、賑わいの町並みを形成していた。現在は、伝統的な建物が少しずつ改変されているが、町並みとしての雰囲気は良く残っており、町並みとして保存されている所が少なく残っている埼玉県内では貴重な地区である。

3、まとめ
自然豊かな環境の中で育まれた飯能の近代和風建築は、織物業と林業という二大産業が隆盛だった時代の文化遺産である。その歴史と痕跡をいつまでも忘れずに継承してほしいものである。
(飯能市文化財保護審議委員・
東海大学名誉教授)

飯能地方の“うちおり”

石井 英子

平成10年の“みんなよう”のある練習日、練習着として素朴な風合いの着物を野口はるさんが持っていました。

そして「この着物、私が織ったのよ。」と話してくれたことが、昔の飯能の織物について知るきっかけとなりました。

私は四国琴平町の出身です。

養蚕地でもなく着物は商品として購入していましたが、その着物の素朴さに感動しました。

飯能地方で養蚕が盛んだった頃、女性たちはしみ蘭や玉蘭など出荷できない手元に残った屑蘭を糸に引いて織物を織り家族の着物や嫁入りを持参する着物を作ったりしていたそうです。

その頃、大正から昭和のはじめに生まれた会員が何人もいて、「あそこにもある、ここにもある」と紹介してくれて、またたく間に名栗から吾野にかけて60点近くの“うちおり”が集まりました。

実際に織っていた当時、“うちおり”という呼び方をしていたかどうかは“です”。

第三者が“うりぎぬ”に対して“うちおり”と呼んでいたような感じもあります。

この60点近くの“うちおり”はすべて「祖母が、母が、私が織りました。」と確認の出来たものです。

そのほとんどが、大正時代から昭和三十年代までに織られたものです。

現在、大半が郷土館の収蔵品となっています。

収集した“うちおり”の織りと柄は次のとおりです。

玉絹の平織、斜子織、玉絹の縞、太織の縞、絹綿交織、縞と併、緯総併、壁織、縮緬、紹、綾織、段織

(参考)

平成12年制作「飯能地方の“うちおり”ビデオ

平成14年郷土館特別展「うちおり」図解

“みんなよう”

飯能地方には“みんなよう”(仕事唄、新民謡、御当地ソング)がたくさんあります。

平成三年から調査をはじめ、その音源(レコード、テープ)、背景、踊り方が把握できた曲目名は、次のとおりです。

吾野機織唄	武蔵機織唄
飯能筏唄	名栗川筏唄
飯能麦打唄	飯能白ひき唄
西川音頭	武蔵野炭鉦小唄
名栗川小唄	吾妻峽小唄
飯能銀座小唄	飯能殿山音頭

子の山山唄 武州高山音頭

正丸小唄

あ、振武軍

飯能小唄

飯能音頭

飯能音頭

加治音頭

美杉台音頭

吾野音頭

制作年代順ではないです。

以上の他に振付がなされていない曲が20曲近くありますが、私たちの会は踊りの会ですので割愛します。

平成五年 郷土館内に「研究会」をスタート。

七年「踊り継ぐ会」となり現在「飯能の“みんなよう”保存会」として毎月一回定例会を行っています。

(参考)

冊子

『飯能の民踊』

DVD

『飯能地方の“みんなよう”と情景』

『奥武蔵“みんなよう”物語』

収集出来た音源(レコード、テープ)資料等は郷土館の収蔵品となっています。

(会員・「飯能の“みんなよう”保存会代表)

20世紀初頭の林業革命を考える
— 西川林業地帯を中心に —
加藤 衛 拓

はじめに—木材・木炭時代の到来
20世紀の初頭に日本の資本主義経済は成立し、発展を始める。主要都市を中心に工業化が進行し、人口も急増した。それらを支える基本素材、燃料、紙・パルプは、近世以来蓄積してきた森林資源から林業が供給する時代となった。1900年(明治33)から半世紀余りの時期である。産業革命とともに林業革命が到来した時代であった。

1、近代的材木商組合の組織化

明治20・30年代、幹線鉄道が敷設され、全国から東京市場へ木材が流入するようになると、西川地方は東京近郊であった有利性がなくなってしまう。それを解消するため、近世以来の入間川・高麗川流域の材木商人(伐出業者)組織である「筏仲間」の近代化が進められた。明治17年(1884)の同業組合準則に基づいて、入間川筋の材木商人たちは明治21年(1888)「埼玉県西川材木商組合」を結成し、山方がはじめて江戸の西方から流されてきた木材を意味する「西川」を名乗り(由緒を語り)、製品管理の厳格化などを開始した。

同33年(1900)重要物産同業組合法に則って、同41年(1908)「武州西川材木商同業組合」に改組し、大正10年(1921)には高麗川筋との合併を果たした。流送から陸送への転換、製材所の設立を背景に、製品の品質管理と品質向上等に努めたのである。

2、伐採・搬出技術の革新

近世には、木材の搬出は全て人の肩で担がれていた。大径材は伐倒地で木挽や削り(丸太を斧で削って角材に)を実行し、最終加工して担ぎ出した。

これに対してこの時期からの伐出方法の革新は、1か所当たりの大量伐採と全幹(切り分けず長いまま)による搬出である。夏に伐倒した杉・檜を棚状に伐倒地に組み上げて冬期まで乾燥させた。この棚をリンと呼ぶ。乾燥させた丸太は、修羅(しゅら)によって搬出されるようになった。修羅とは、丸太約15本を本(もと)を下にして樋状に組み上げられており、これを修羅1枚と呼んだ。修羅はリンを崩して、搬出する丸太で作られ、何枚もつなぎ合わせて河原や道路まで延長した。修羅出しは冬期の作業で、丸太は修羅の中を滑り落とされた。その結果、木材加工は河原や道沿いの土場でなされるようになった。

明治末期から大正初期にもたらされた搬出技術が木馬(きんま)である。木馬はカシで作ったソリ

である。修羅では常に一定以上の傾斜がないと搬出できないが、木馬では緩い勾配でも搬出が可能であった。

3、製材所の設立と陸送への転換

この時代、木材加工分野では製材所の設立が始まった。最初の製材所は明治37年(1904)に原市場村に設立された。水車動力の製材所で、丸鋸による製材であった。以後大正期にかけて同様の製材所が建設されていった。帯鋸による製材には電気供給が不可欠であった。

現飯能市域への電気供給は、帝国瓦斯力電灯による飯能町へが明治44年(1911)で最も早く、加治村、精明村・南高麗村へとその範囲を広げた。吾野村・東吾野村は大正10年(1921)吾野水力電気の建設により、名栗村・原市場村は大正11年(1922)名栗水電の建設により供給が始まった。電力供給範囲の拡大につれ、製材所数が増加して電力化も進行した。大正5年(1916)の全国の製材工場統計によれば現飯能市を構成する町村には電力1軒を含む10軒の製材所があった。18年後の昭和8年(1933)には34軒に増加し、そのうち電力化した製材所は20軒(59%)にのぼっていた。

明治40年代には荷車・馬車が往来できる道路整備が積極的になった。大正4年(1915)に武蔵野鉄道が池袋―飯能間に開通する

と、木材運送は筏流しが次第に姿を消し、荷車・馬車によって飯能まで、飯能から鉄道によって東京へ輸送されるようになるが、鉄道輸送の期間は短く、大正末期にはトラックがその主力となった。しかし、飯能駅前には材木問屋と製材所が集積し、飯能は西川材の産地市場として重要な位置を占めるに至るのである。

4、拡大造林の展開

造林の急速な拡大は、明治37年(1904)、日露戦争開戦以降である。名栗村を例にとると、青年層の活躍によって、現飯能市域では同村にのみならず、存在した区有林(旧村中入会地)に対して、製炭跡地や萱場に積極的な杉・檜造林が始まった。分収によるものである。大正2年(1913)からは、埼玉県が村有林(明治44年<1911>元御林を国有林から払い下げ)・区有林と部分林契約を結んで県造林が始まった。製炭跡地への造林である。この遂行のため県から派遣された主任技師・秋山賢夫は、区有林に共同造林を進める青年たちに良質材を育成するための枝打ちなど、最新の造林技術を指導した。その技術普及がその後の西川材の質を一層高めていったと思われる。

19世紀末、材木商組合が自ら「西川」を名乗り由緒を創出するとともに、20世紀初頭の製品の厳格な規格化、造林技術の高度化がある

まって、西川材のブランド化に成功するのである。

5、名栗村村有財産の統一と上・下共有林組合の成立

前述したように、現飯能市域では近世の上・下名栗村だけに広大な村中入会地が存在し、名栗村合併後も、財産区有林としてそれぞれが区会が運営してきた。大正期から昭和恐慌までに両区とも負債を抱えるに至り、昭和11年(1936)、その整理が進められた。半分を名栗村に寄付して村有林を拡大し村有財産の基礎を築くとともに、半分を売却して負債の返済に充てた。上名栗区では、1000株に分けて1株35円で区民に売却し負債を返済するとともに、その株主によって上名栗共有林組合を設立した。下名栗区は、林地約8町歩の売却と立木販売によって負債を返済し、残った区有林は下名栗区民に1株ずつ配分し、下名栗共栄造林組合を設立した。

これにより、以後の名栗村の森林の所有構造が確定した。実測面積で確認すると、全林野面積5500町歩、村有林(現市有林)1700町歩(31%、内県造林が440町歩)、私有林3800町歩、うち上・下名栗の共有林がそれぞれ約500町歩、あわせて1000町歩(18%)と考えられ、個人有林は2800町歩(51%)となる。このように名栗地区の森林

には大きな団地が存在するため、今後の西川林業の改革にとって重要な役割を担うと期待される。

おわりに

現飯能市域を含む武蔵国西部山村は、江戸近郊の利点を生かして近世から炭・材木の生産が開始され、発展した。近代には、東京の都市化と産業化に対応して、その資源として西川地方の森林は位置づけられた。幹線鉄道開通による全国から東京への木材供給に対抗して、材木商人の近代的組織化、伐採・搬出・製材過程の近代化、拡大造林と育林技術の改革という「林業革命」を進め、近代の西川林業はその地位を確立し、戦後復興期、高度経済成長期への活況へと継続した。

しかし、1980年代以降西川林業だけでなく全国の林業は低迷する一方で、森林蓄積は十分にあり「森林飽和」とさえ言われている。20世紀の初頭の「林業革命」とは違った意味で、新たな需要を開拓しつつ、21世紀の「林業革命」を起す必要に迫られている。

(筑波大学生命環境系教授)

参考文献

太田猛彦(2012)『森林飽和：国土の変貌を考える』(NHKブックス1193)NHK出版

加藤衛拓(2007)『近世山村史の研究：江戸地廻り山村の成立と

展開』吉川弘文館

さいたま民俗文化研究所編(2008)『名栗の民俗下』飯能市教育委員会

白井哲哉・須田努編(2016)『地域の記録と記憶を問い直す：武州山の根地域の一九世紀』八木書店

日本林業技術協会編(1972)『林業技術史第1巻：地方林業編上』日本林業技術協会

農山漁村文化協会製作(1957)『西川林業(スライド)』(優良林地シリーズ・その8)農山漁村文化協会

原田信男編(2011)『地域開発と村落景観の歴史的展開：多摩川中流域を中心に』思文閣出版

飯能市郷土館編(2005)『特別展図録 飯能の水力発電：吾野・名栗に電気がひけた日』飯能市郷土館

飯能市郷土館編(2008)『特別展図録 名栗の歴史：森林とともに歩んだ文化をさぐる』飯能市郷土館

飯能市郷土館編(2015)『西武池袋線飯能池袋間開通100周年記念特別展図録 武蔵野鉄道開通』飯能市郷土館

飯能市名栗村史編集委員会編(2008)『名栗の歴史上』飯能市教育委員会

飯能市名栗村史編集委員会編(2010)『名栗の歴史下』飯能市教育委員会

丸山美季(2016)「近代材木商同業組合の成立と機能：準則組合西川材木商組合を事例として」『林業経済』69(7)、1-20

山口明日香(2015)『森林資源の環境経済史：近代日本の産業化と木材』慶應義塾大学出版会

江戸の残照と
武蔵野の「地口行灯散歩」

第一部 加藤 栄子

第一部
双柳に嫁いだ三十五年前、地元の祭りで見かける「面白い物」が気になりました。大正十一年生まれの義父に聞いても「子供の頃からあったが呼び名は分からない」との返事。祭りの朝、破いて捨てられ張り替えられる消耗品扱いでした。

その「面白い物」が「地口行灯」だ、と判明したのは、平成十三年四月二十二日の飯



図① 揚州(橋本)周宜 江戸風俗十二月之内二月初午稻荷祭礼之図

能郷土史研究会講演会、石川博司先生の「祭り」と民俗「地口行灯の話」でした。質疑応答の際、「双柳にも出ます!」と、申し上げたところ暑い七月の「双柳稻荷神社の祭礼」のわざわざ調査に来て下さったのでした。石川先生は、毎年の調査結果を冊子にまとめ飯能市立図書館に寄贈されています。もやもやが晴れて、その後は資料や行灯絵を収集することが出来ました。

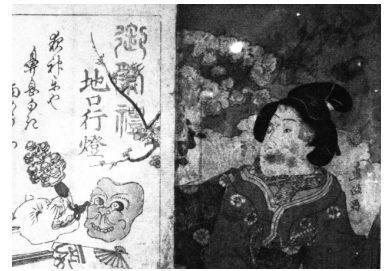
綿貫 雪(きよし)著「言語遊戯の系譜」によりますと、地口の「地」は江戸のこと、上方では口合(くちあい、くちやい)が当てはまると書かれています。「地口行灯を飾る」というのは、享保の頃に始まったらしいのですが、一度衰退して嘉永の頃に復活(図①)豊作祈願と子供の成長を願ったようです。

地口行灯は、江戸の祭礼(図②)から地方へ広がったようです。舟運との関連が三島市や秋田市の祭りでも灯ります。群馬を除く関東一円、利根川、荒川、多摩川流域に見られることを考慮すると、筏繋がりも推測してきます。足立区に



図② 現在の千束稲荷神社 初午祭の様子

は、旗竿を名栗から買う神社があるそうです。地口絵は、浮世絵と同じく軽くて嵩張らない良い土産品。筏師は歩いて戻るので、懐に入る安価な江戸の流行り物は好都合でしょう。ただ、もう少し、文献・資料を読み解かなくてはなりません。また、地口元句帳Ⅱ種本(図③)も結構刷られました。現在のアンチヨコのようなもので多くは地口に絵が添えられています。河鍋晩斎も描いています。面白い事に元句帳には「地口行灯の決まり事」までは載っていません。行灯の上下に見られる「甕垂れかすみ」の事です。紙面の上だけ、上下、波線、



図③「御祭礼地口行燈」錦亭綾道(きんていりょうどう)直政 画

図④ 浅草伝法院通り



図⑤ 飯能春日通り 吉田行男氏画



図⑥ 中山天満宮大祭 新井和雄氏画

直線、色も様々。地口絵も写し、創作、何でもあり。元句も歌舞伎・川柳、時事問題。(図④⑤)貼り方も白木の木枠への外張りが殆んどですが、中山天満宮例大祭で見た黒塗り枠に内張りの手間のかかった行灯(図⑥)を見た時は感激でした。永く続く双柳も描き手が所沢の増田屋、日高市の川村太一郎氏、森

泉双輪氏、現在の森泉忠雄氏と代わる毎に画風が変化。春日通り復活は大歓迎です。多種多様で許され「ゆるい笑いの民俗文化」が、飯能全域に点在して残っている事は大変貴重でなんて楽しい事でしょう。市民権はほとんどありませんが「笑って健康」の昼行灯的存在です。

「地域の歴史や民俗を知る事は、郷土に親しみ郷土を愛する事へとつながりますよ」と、坂口和子前会長から応援されて今日まで継続できました。また、この度の飯能郷土史研究会のご理解に感謝しております。

第二部

川越市 川越一力齋津知屋提灯店 土屋澄子氏をお迎えして実際に描いて頂きました。寛永から続く一力齋の名と技を継ぐ「気さくな澄子さん」は、会員に取り囲まれ、覗かれる中、丁寧な解説をしながら地口絵を二枚仕上げて下さいました。



ました。賑やかな中でも墨を磨って、気持ちの準備。大事な種本も持参して下さいました。



土屋澄子氏画 元句は何でしょう?



遠方からも発注もあり、年間1、000枚以上、一度に200枚等の大量注文にも同じ絵は描かないそうです。女性らしい、流れるような線が美しい澄子さんの地口絵。「半紙は、縦・横どちらにも使います。縦長・横長の行灯絵になる訳です。美濃(紙)判は、縦使用。」行灯絵を墨で写す際に半紙の下に置かれた種本が全く汚れていないのには驚きました。*シミだらけの種本も見ます。



「初雁賞」受賞 あえて笑顔写真で紹介。

参考資料

- 『地口須天寶』(安永二年)
- 『神事行燈』(文政十二年)大石真虎
- 『平成十四年の地口行灯』他 石川博司
- 『地口行灯の世界』(平成十七年) 足立区立郷土博物館
- 『江戸ぐち辞典川越の灯ろう絵』(平成二十年)色田幹雄

飯能郷土史研究会の活動

◎平成二十八年年度事業報告

▽総会

・四月十七日(土)

講演会

「飯能市の近代和風建築」について

講師 羽生修二氏

(東海大学名誉教授・

飯能市文化財保護審議委員)

▽例会

・六月二十五日(土)

「飯能地方の「うちおり」と

はたおり唄」

講師 石井英子氏

(飯能の「みんよう」保存会代表

・郷土史研究会会員)

・八月二十七日(土)

「秩父郡中澤組について」

新編武蔵風土記稿を読みながら」

新編武蔵風土記稿の本文(巻之

二百四十七 秩父郡之二)を読みなが

ら、主に天神社、宗穩寺など地域の寺

社について詳しい説明をされました。

講師 大野亮弘氏

(竹寺住職・郷土史研究会会長)

・十月十四日(金)

県外研修

「八王子城見学」

昨年2月の例会で『城郭の基礎知識』を講演して下さった中上敬一氏の案内で見学しました。

講師 中上敬一氏

(日本石仏協合理事)

・九月十八日(日)

「中山備前守信敬公

生誕250年記念の会」

講演とパネルディスカッション

『水戸藩附家老中山家十代信敬公に

ついて』

講師 佐川春久氏

(高萩市就将館館長)

・信敬公の伝えた一弦琴音楽演奏

市民会館小ホール

飯能郷土史研究会後援

・十月

特別展「高麗郡建郡

一三〇〇年記念展」

郷土館事業に協賛

・十二月二十四日(土)

「20世紀初頭の林業革命を考える」

講師 加藤衛弘氏

(筑波大学教授)

・二月十八日(土)

「地口絵遠望」

第一部 講師 加藤栄子氏

(郷土史研究会監事)

第二部 地口絵実演

講師 土屋澄子氏

(川越一力齋津知屋提灯店)

・三月三十一日

郷土はんのう三十七号発行

◎平成二十九年年度事業計画

▽総会

・四月二十二日(土)

講演会

「諏訪神社創建500年祭を終えて」

―境内建造物案内―

講師 加藤義雄氏

(郷土史研究会理事)

▽例会予定日

・六月二十四日(土)

・八月十九日(土)

・十月十三日(金)

県内研修(場所未定)

・十二月十六日(土)

・二月十七日(土)

・三月三十一日

郷土はんのう三十八号発行

新会員

須藤みち香氏 (飯能市美杉台)

半田敦史氏 (飯能市征矢町)

宮沢庸郎氏 (日高市栗坪)

山下英一郎氏 (飯能市中藤)

渡辺俊通氏 (飯能市中山)

計報

理事 井上晃氏(飯能市南町)

謹んでご冥福を

お祈り申し上げます。

編集後記

郷土はんのう37号は定例会での発表を記録する形で各講師の方に執筆していただきました。近代の和風建築、「うちおり」と「みんよう」、そして林業と、それぞれが飯能地方の近現代史に絡み合うテーマになっていきます。是非ご精読ください。

(関根貴志)

郷土はんのう 第三十七号

発行日 平成二十九年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒357-0034 埼玉県飯能市東町三一一六

(堀越方)

電話九七三―三三八一

印刷所 大野亮弘

(有)ビイ・ユースフル